



JAPANESE / JAPONAIS / JAPONÉS A1

Higher Level / Niveau Supérieur (Option Forte) / Nivel Superior

Thursday 18 November 1999 (morning) / Jeudi 18 novembre 1999 (matin)
Jueves 18 de noviembre de 1999 (mañana)

Paper / Épreuve / Prueba 1

4h

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

Do NOT open this examination paper until instructed to do so.

This paper consists of two sections, Section A and Section B.

Answer BOTH Section A AND Section B.

Section A: Write a commentary on ONE passage.

Section B: Answer ONE essay question. Refer mainly to works studied in Part 3 (Groups of Works); references to other works are permissible but must not form the main body of your answer.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

NE PAS OUVRIR cette épreuve avant d'y être autorisé.

Cette épreuve comporte deux sections, la Section A et la Section B.

Répondre ET à la Section A ET à la Section B.

Section A: Écrire un commentaire sur UN passage.

Section B: Traiter UN sujet de composition. Se référer principalement aux œuvres étudiées dans la troisième partie (Groupes d'œuvres); les références à d'autres œuvres sont permises mais ne doivent pas constituer l'essentiel de la réponse.

INSTRUCCIONES PARA LOS CANDIDATOS

NO ABRA esta prueba hasta que se lo autoricen.

En esta prueba hay dos secciones: la Sección A y la Sección B.

Conteste las dos secciones, A y B.

Sección A: Escriba un comentario sobre UNO de los fragmentos.

Sección B: Elija UN tema de redacción. Su respuesta debe centrarse principalmente en las obras estudiadas para la Parte 3 (Grupos de obras); se permiten referencias a otras obras siempre que no formen la parte principal de la respuesta.

第一部

次のⅠ（a）の文章とⅠ（b）の詩のうち、どちらか一つを選んで解説しなさい。
（コメンタリーを書きなさい。）

Ⅰ（a）

はじめて嵯峨の家をおとずれた時、志村さんは散歩から帰ったところで、両手にるり色の実のついた枝を大事そうにかかえていた。「これはクサギといって、……ちょっと待って下さい、今お見せします」そういうながら奥へ入ると、きものを一枚出して来て下さった。それはすき通るように美しい水色のきものであった。藍より少し黄味がかって、透明なガラスを思わせるほど淡い。

「こんな色はクサギでしか出せません。嵯峨にはまだ草木染めに使える植物がそこらにあって、ちょっと散歩に出ても、こんなに採れるんですよ」

志村さんは生き生きした表情でそういった。

その後も、私がたずねる度に新しい発見があった。ある時、山を歩いていると、焚火をしている老人がいて、みれば椿の枝を燃している。『万葉集』にも、「紫は灰さすものぞ……」と謳われたように、椿の灰は染めものにとって、最高の媒染（染料を定着させる材料）である。ふくみさんは、その場で老人と契約をし、毎年椿の灰を手に入れることに成功した。またある時は、街路樹の枝を剪定して、トラックで何台も運んでいるところへ行き合せた。早速、市役所に交渉すると、焼却炉で焼き捨てるという。その灰も買えることになったが、草木染めの場合、原料と同じくらい重要なのが媒染で、灰のよしあしで発色が左右される。街路樹は、主に銀杏その他の雑木であるが、これは藍瓶に入れるための灰であって、どんな場合にも、新鮮なものと、交りけのないことが条件である。嵯峨に住んでいられるから、そういうものも手に入るのであって、そこに移ってからの作品が一段と輝きを増したのも、彼女の生活が充実したことを語っている。今では日々の暮しと仕事が、一分のすきもなく調和しているように見え、古い歴史を持つ嵯峨の里は、志村さんによってその伝統がよみがえったような感じさえる。

だが、ふくみさんが草木染めに集中するようになったのは、そう古いことではない。最初は化学染料でも、同じように染まるのではないかと思っていたが、併用しているうちに両者の違いがはっきりと見えて来た。化学染料を用いた作品には、何か異質な感じがあり、植物染料の方は自然と同じ次元にある。人間の血に通うものがある。そのことに開眼して以来、彼女は草木染めのとりことになった。現代でも、「草木染め」と称するものは少なくない。が、どこか感じが暗かったり、泥臭さからぬけきれぬものが多いが、だんだん工夫して行くうちに、明るく透明な色彩が出せるようになり、これが千年前の日本の色ではないかと信ずるに至った。同じ木や草にも、切る時季があることも知った。そういうことを昔の人は、経験から熟知しており、あまり当り前のことだから、何も書

35 き残してはいない。同じようなことは他にも沢山あって、染織に関わらず、現代の工芸作家が苦心するのは、そのの所なのである。たとえば桜は花の咲く前、二月頃に切るのが一番いい。花へ行く紅の色素が、幹の中にたくわえられるからで、木工の黒田辰秋氏にも、そういう話を聞いた覚えがある。またたとえば刈安は、鮮やかな黄の染料であるが、穂の出る直前、お盆の頃に刈る。桜や梅と同じように、穂に出る色が茎の中に用意されるからで、その時期を逸すると、ぼやけた色に染まってしまう。

40 「いわば花の命を私は頂いているわけですね。ほんとうは花が咲くことが自然なのに、私が横どりするのだから、申しわけないのですけれど、織物の上に花が咲いてほしい、咲かせねばならないという責任感が湧いて来て、……それですますます深入りしてしまうんですよ」

45 「花の命は短くて」というけれども、志村さんの手によって、永遠に活かすことができるならば、植物にとってこれほど幸福なことはあるまい。そこに志村ふくみの織物の秘密がある。同じ植物染料を使っても、同じ色が出せない作家はたくさんおり、それは本人のひたむきな努力によるとしても、天性の資質も多分にあるに違いない。志村さんの言葉を真似ていえば、彼女の体内には、自然の花と同じ血が流れており、同じ次元で脈打っているのであろう。その証拠には、健康な時には、糸もいい色に染まるし、藍もよく発酵するという。

(白州正子「日本のたくみ」)

白州 正子 (一九一〇年～一九九八年) 随筆家。幼時から能を修め、古典芸能、文学、美術工芸に通じ、『かくれ里』『西行』『日本のたくみ』(一九八一)等の著作がある。

1 (b)

一つのメルク

秋の夜は、はるかの彼方に、
小石ばかりの、河原があつて、
それに陽は、さらさらと
さらさらと射しているのでありました。

- 5 陽といつても、まるで^{けいし}珪石か何かのようで、
非常な個体の粉末のようで、
さればこそ、さらさらと
かすかな音を立ててゐるのです。

- さて小石の上に、今しも一つの蝶がとまり、
10 淡い、それでいてくっきりとした
影を落としているのです。

やがてその蝶がみえなくなると、いつのまにか、
今迄流れてもいなかった川床に、水は
さらさらと、さらさらと流れているのでありました……

(中原中也・『中原中也全集』第一巻)

(注)

中原中也(一九〇七―一九三七) 詩人。詩集に『山羊の歌』『在りし日の歌』がある。
珪石 陶磁器やガラスの原料にする岩石や鉱物。
非常な個体 特別な物質。

第二部

授業で学習した部門(Part 3)から、(a)(b)の問題のうち一つを選んで、エッセイを書きなさい。エッセイを書くにあたっては、必ずPart 3で学習した文学作品三つのうち二つに言及すること。なお、この二作品のほか、他の作品について述べてもよい。

—

2. 美の探求

- (a) あなたの読んだ作品では、「美」の世界を形成するために、文体や構成などの面で、作者はどのような工夫をしていると思いますか。あなたの考えるところを述べなさい。

あるいは

- (b) 日本の美意識には死を美しいものとして崇^めめたり、滅びるものに哀れを感じて詠嘆するという傾向があるという人がいます。この考え方に同意しますか。あるいは否定しますか。あなたの読んだ作品の中から、例をあげて論じなさい。

3. 社会と個人

- (a) 作中人物がその社会で生きていく中での、自己の信念との闘いは、どのように描かれていますか。二つ以上の作品を比較して、論じなさい。

あるいは

- (b) あなたの読んだ作品の中で、人間としての誇りはどのように描かれていますか。それが踏みにじられた時、作中の人物はどのように反応していますか。

4. 自然と人生

- (a) あなたの読んだ作品において、作者は自然描写を通して何を伝えようとしていますか。二つ以上の作品を比較し、あなたの考えるところを述べなさい。

あるいは

- (b) あなたの読んだ作品において、作中の人物は人生をどのように観ていますか。また、そのような人生観に到達した理由についても言及しなさい。

5. 家族

- (a) あなたの読んだ作品において、個人としての意識と家族との関係はどのように描かれていますか。

あるいは

- (b) 危機に直面した時、あるいはいつもと違う状況に陥ったとき、家族がどのように反応するか、二つ以上の作品を比較し、家族というものについてあなたの考えるところを述べなさい。

6. 愛と友情

- (a) あなたの読んだ作品において、愛と孤独との関係はどのように描かれていますか。

あるいは

- (b) あなたの学習した作品において、作者の描く愛もしくは友情は、作品の終末部分でどのような効果を生み出していますか。二つ以上の作品を比較して論じなさい。